**日本財団学生ボランティアセンター**

**2016年度　事業報告書**

**Gakuvo Style Fund**

●　事業概要

本事業は、ボランティアとして、単に誰かの役に立つだけではなく、活動を通して自らが成長し、社会へはばたく人材を育成することを目的として設立した事業である。次の３コースを設定して、学生ボランティア団体に対して資金協力を行う。

1. Colla・vo　協力金：上限20万円

新たな活動展開を図るため、既存の枠組みを超えた組織とのコラボレーションを企画する学生を支援するコース。

1. Yuru・vo　協力金：上限10万円

はじめの一歩を踏み出そうとする学生を支援するコース。

1. Baca・vo　協力金：上限30万円

活動を行う地域で発生している課題解決に、徹底的にのめり込む活動を行う学生を支援するコース。

・Gakuvo　Styleとは・・・・

一般のボランティアとは異なり、ボランティア活動を通してボランティア自身が、日常生活の中では意識していなかった社会問題に気づき、その解決を模索し、行動に移すことによってボランティア自身が成長していくプロセス、およびその成長に重きをおいたボランティアの姿を指す。もちろん、成長するだけではなく、一般のボランティア同様、社会問題を改善していくことも重要である。

●　2016年度の概要

□　第3回Gakuvo Style Fund

1. 募集期間：2016年6月1日（水）～16日（木）
2. 審査内容 1. 書類審査　　　：2016年6月17日（金）～7月12日（火）

2. プレゼン審査会：2016年7月30日（土）（日本財団バウ・ルーム）

※Yuru・voは書類審査のみ

1. 応募団体数 1. Colla・vo 21団体 （4,032,650円）

2. Yuru・vo 16団体 （1,600,000円）

3. Baca・vo 43団体 （12,346,370円）

1. 採択団体数 1. Colla・vo 7団体 （1,320,000円）

2. Yuru・vo 13団体 （1,300,000円）

3. Baca・vo 20団体 （5,470,000円）

1. 審査委員 1. 田中美咲（一般社団法人防災ガール　代表理事）

2. 谷口浩一

（ソニーマーケティング株式会社　広報・渉外部　総括部長）

3. 西尾雄志

（日本財団学生ボランティアセンター　代表理事（理事長））

4. 西村万里子（明治学院大学　ボランティアセンター長）

5. 野沢慎司（明治学院大学　副学長）

予 算：30,401,000円

実 績：18,851,906円

主だった支出：協力金（学生ボランティアの活動に対する協力資金）

執行率：62.0％

理由：決定した協力金の金額が、予算より低かったため

**大学等と連携したボランティア関連講座、ボランティアプログラムの開発及び実施**

●　事業概要

わが国の高等教育に対して大きな変革が求められて久しい。特に従来型の教育だけではなく、実習など、教室外での学びを含めた学習や、地方公共団体などと連携を図り、多様な教育を先駆的に実践している大学が増えている。

当センターでは、設立当初より、学生時代のボランティア活動をはじめとする社会参画が、全人的な人間成長に寄与すると考え、教育改革に積極的な大学やその関係機関と協力関係を構築している。そのなかで、大学の教育力を広く拡充し、学生のボランティア活動及び社会参画の推進を図るのが本事業である。

●　2016年度の特徴的な事業①－中央大学との協働事業

中央大学とは、2014年1月に、協力協定を締結し、2015年度からボランティアセンターが行う東北地方での復興支援活動などにおいて協働事業を実施してきた。2016年度からの法学部における「法と災害」をテーマとした授業の開講を目指し、2015年度より法学部の教員・大学院生による宮城県仙台市、南三陸町、気仙沼市での事前調査を経て、今年度後期（9月～1月）に、法学部の2年生を対象とした「現代社会分析Ⅱ: 311は現代社会のなにをあらわにしたか」を開講した。

この授業は、講義や実習を経て学生一人ひとりもしくは数人のグループを作り、各々テーマを設定し、それについて学習をするというアクティブラーニングの授業である。また、法学という専門性と社会問題を融合させることにより、専門的な知識を活かした社会参画する学生の育成を目的としている。

本授業は、東日本大震災からの復旧・復興過程では、これまで経験のない新しい事態が多く、行政法・財産法の脆弱性が露わになったことから、「法」の意義・根本・課題を問い直し、また現在かかえる人口減少・地元の基幹産業である水産業の衰退など、課題について考えることを目的として設置された。

そのため、実際に宮城県気仙沼市、南三陸町、仙台市に赴き、当事者である弁護士・信用金庫行員・社会福祉協議会職員・議会議員の方々にお話しを伺うための実習を10月に行った。その実習と講義を経て学習したことを、現地で発表するための報告会を2月に気仙沼市にて行った。

法学という専門分野を学ぶ学生が参加し、専門性を活かしながら、社会課題の解決を学んだ。次年度以降も継続して取り組む予定である。

●　2016年度の特徴的な事業②－千葉大学国際教養学部との協働事業

千葉大学とは2012年4月に協力協定を締結し、2012年度から複数の授業を実施してきた。そのうちの一つである千葉県鴨川市をフィールドとした授業を、2012年度から継続して行ってきた。同じ千葉県内の都市とはいえ、大学が位置する千葉市から80kmほど離れている鴨川市は、人口減少・少子高齢化など、様々な問題をかかえているという背景がある。一方で、地元で課題を解決するべく活動している有志グループもあることから、講義と実習を通じて、地域の実情とコミュニティ再生に取り組む地元の方々から直接実践を学ぶという授業である。

鴨川市をはじめ千葉県内では「千葉大学」という大学にブランド価値があり、多くの人々が注目することを活かし、「千葉大学生が地元にやってくる」という地元の方々の意識を高揚させ、2016年度の授業では、留学生を含む受講生13名が企画した小学生約50名を対象としたイベントを、２日間にわたって開催した。

2012年度から継続して行ってきた鴨川市での活動について、千葉大学の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業：都市と世界をつなぐ千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成事業（COC＋）」事業の一環として位置付けられることとなり、2016年10月、千葉大学と鴨川市で地方創生事業の包括協定が結ばれ、ますます大学と地域のつながりが強くなっていくことが期待できる。

今後も、このような地域と大学のつながりを活用した教育を、千葉大学と協力して展開する予定である。

予 算 ：23,522,000円

実 績 ：25,661,443円

主だった支出：旅費、バス諸費用(全国の大学との協働事業、ボランティア実習)

執行率 ：109.1％

**学生ボランティア派遣事業**

●　事業概要

2011年に発生した東日本大震災を機に始まったのが、学生ボランティア派遣事業である。東北を中心に、これまでフィリピンや広島、茨城県常総市、熊本県といった災害による被災地での活動を行ってきた。東北の派遣は2011年4月よりチーム「ながぐつ」プロジェクトとして、定期的かつ継続的に行っている。ボランティア活動だけではなく、学生自らが現地に足を運ぶことで得る学びや気づきから、震災を他人事としてではなく、自分の事として取り組んでもらいたいという想いの下、派遣を行っている。

●　2016年度の事業　チーム「ながぐつ」プロジェクト

　今年度より参加者募集に関するチラシ・ポスターの送付先大学を全国各地に広げたことで、首都圏だけではなく各地方からも参加者が増加した（首都圏を除く2府13県）。2017年3月時点で278大学から延べ10,246名の学生が参加している。

　活動としては、これまでの繋がりを活かした活動を行いつつ、学生たちと現地の方々との対話の時間を重視したり、夜のふりかえりではワークショップを実施するなど、より現地での学びを深めるプログラムを実施した。

また昨年から取り組んでいる「伝える場」を、今回は後述する熊本地震ボランティア参加者とチーム「ながぐつ」プロジェクト参加者が協力して実施した。場所や被害状況などは異なるが「災害」という共通のワードを軸に、自分にできることを継続的に支援していく重要性や、自身に災害が降りかかったときのために防災の観点についても組み込み、盛りだくさんな内容で参加者の方に伝える機会となった。

またチーム「ながぐつ」プロジェクト参加者が熊本地震に、熊本地震ボランティア参加者が東日本大震災に対しての意識を再度持つきっかけにもなったことも伺えたことから、コラボレーションをしたことによる相乗効果が見られた。

チーム「ながぐつ」プロジェクトは“きっかけボランティア”として学生たちがはじめの一歩を踏み出しやすいプログラムであるが、その中からより被災地や災害について深めたい、伝えたいという想いを持つ学生たちが活躍できる場を引き続き提供していきたい。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 活動日程 | 参加者数 | 活動内容 |
| 137陣 | 4月22日（金）～24日（日） | 2名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 138陣 | 4月29日（金）～5月2日（月） | 11名 | ・海岸清掃  ・被災地視察 |
| 139陣 | 5月27日（金）～29日（日） | 4名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 140陣 | 6月24日（金）～26日（日） | 2名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 141陣 | 7月2日（土）～3日（日） | 94名 | ・フラッグフットボール教室  ・農業支援 |
| 142陣 | 7月9日（土）～10日（日） | 26名 | ・農業支援  ・仮設住宅支援 |
| 143陣 | 8月17日（水）～20日（土） | 9名 | ・古民家再生プロジェクト  ・被災地視察 |
| 144陣 | 9月9日（金）～12日（月） | 10名 | ・イベント手伝い  ・被災地視察 |
| 145陣 | 9月30日（金）～10月2日（日） | 4名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 146陣 | 10月22日（金）～24日（日） | 3名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 147陣 | 11月19日（金）～21日（日） | 10名 | ・植樹祭手伝い  ・農業支援 |
| 148陣 | 11月25日（金）～27日（日） | 6名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 149陣 | 12月16日（金）～18日（日） | 12名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 150陣 | 1月13日（金）～15日（日） | 8名 | ・農業支援  ・被災地視察 |
| 151陣 | 2月10日（金）～13日（月） | 10名 | ・イベント手伝い  ・被災地視察 |
| 152陣 | 2月16日（木）～19日（日） | 10名 | ・植樹祭手伝い  ・被災地視察 |
| 153陣 | 2月28日（火）～3月1日（水） | 91名 | ・フラッグフットボール教室  ・農業支援 |
| 154陣 | 3月3日（金）～5日（日） | 36名 | ・農業支援  ・仮設住宅支援 |
| 155陣 | 3月10日（金）～13日（月） | 12名 | ・イベント手伝い  ・被災地視察 |
| 156陣 | 3月28日（火）～30日（木） | 10名 | ・農業支援  ・仮設住宅支援 |

●　2016年度の特徴的な事業①―熊本地震ボランティア派遣

学生ボランティア派遣では、これまでに土砂災害に見舞われた広島県広島市や超大型台風30号（ハイエン）によって甚大な被害に見舞われたフィリピン共和国パラワン州クリオン島、昨年度は水害に見舞われた栃木県鹿沼市、茨城県常総市などに学生ボランティアを派遣してきた。

2016年4月14日、16日と立て続けに発生した「平成28年熊本地震」では熊本県、大分県が甚大な被害に見舞われた。本震が発生した16日以降、情報収集及び現地調整を進め、5月21日より順次学生たちをボランティア活動へ派遣した。

5月21日～9月21日までの4か月間で、全9陣を派遣し、延べ630名、82大学（加えてアメリカンスクールと高等学校が1校ずつ）の学生たちが全国から集結した。

大学の授業がある5月～7月にかけて実施した第1陣～5陣は、1泊2日（第3陣のみ車中泊含む3泊4日）の短期集中型、夏季休暇期間である8月～9月にかけて実施した第6陣～9陣は、4泊5日（第8陣のみ車中泊含む5泊6日）の中期間どっぷり型で活動に取り組んだ。

活動内容としては、倒壊した家屋の中から家財を搬出したり、大切な品を瓦礫の中から探し出したり、瓦の撤去・運搬などを行った。活動地域は、震度7を観測した上益城郡益城町を中心に行ったが、益城町以外にも阿蘇郡南阿蘇村、阿蘇郡西原村でも活動を行った。

今回の活動で、「人手」として熊本県の被災地の力になったことはいうまでもないが、被災された方々にとって自分の子どもや孫世代に近い学生たちが、全国各地より集まり、ひたむきに活動に取り組む姿は被災された方々の気持を明るくしたり、前向きにさせる力ともなった。

＜5月～7月　短期型派遣＞

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | **1陣** | **2陣** | **3陣** | **4陣** | **5陣** |
| **活動**  **日程** | 5月21日（土）～22日（日） | 5月28日（土）  ～29日（日） | 6月10日（金）  ～13日（月） | 6月25日（土）～26日（日） | 7月16日（土）～17日（日） |
| **活動**  **場所** | 熊本県  上益城郡益城町 | 熊本県  上益城郡益城町 | 熊本県  上益城郡益城町 | 熊本県  上益城郡益城町 | 熊本県  上益城郡益城町 |
| **集合・解散場所** | 博多駅 | 博多駅 | 仙台駅 | 博多駅 | 博多駅 |
| **宿泊施設** | 南関町B&G  海洋センター | 南関町B&G  海洋センター | 南関町B&G  海洋センター | 南関町B&G  海洋センター | 南関町B&G  海洋センター |
| **参加**  **者数** | 9名 | 19名 | 36名 | 29名 | 19名 |
| **男女比** | 6：3 | 15：4 | 32：4 | 13：16 | 10：9 |
| **参加**  **大学数** | ８校 | 13校＋予備校生 | 7校 | 17校＋高等学校＋アメリカンスクール | 13校 |
| **活動内容** | ・お米、冷蔵庫等の家財道具搬出  ・瓦の片付け | ・農機具を中心とした搬出、  ブロック塀整理  ・ニーズ調査  ・神社参道づくり | ・被災家屋の瓦  おろし、運搬  ・倒壊したブロック塀の解体  ・被災家屋からの家財搬出  ・瓦礫撤去  （被災された方の大切なものとの分別） | ・被災家屋の瓦運搬及び家財整理  ・倒壊したブロック塀の解体及び整理  ・雨漏りのする家屋のビニールシート設置  ・土砂崩れのあった神社での土嚢設置 | ・被災家屋の瓦運搬及び家財整理（被災された方の大切なものとの分別）  ・雨漏りのする家屋のための土嚢づくり及びビニールシート設置  ・土砂崩れの  あった畑での土嚢設置 |

＜8月～9月　中期型派遣＞

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | **6陣** | **7陣** | **8陣** | **9陣** |
| **活動日程** | 8月1日（月）  ～5日（金） | 8月22日（月）  ～26日（金） | 9月5日（月）  ～10日（土） | 9月17日（土）  ～21日（水） |
| **活動場所** | 熊本県  上益城郡益城町 | 熊本県  阿蘇郡南阿蘇村 | 熊本県  上益城郡益城町 | 熊本県上益城郡益城町及び阿蘇郡西原村 |
| **集合・**  **解散場所** | 新大阪駅 | 新大阪駅 | 仙台駅 | 博多駅 |
| **宿泊施設** | 長洲町地域福祉  センター | テント泊 | 長洲町地域福祉  センター | 長洲町地域福祉  センター |
| **参加者数** | 20名 | 29名 | 19名 | 17名 |
| **男女比** | 6：14 | 22：7 | 6：13 | 4：13 |
| **参加**  **大学数** | 13校 | 15校 | 11校 | 10校 |
| **活動内容** | ・被災家屋の家財  整理、搬出、  撤去  ・引っ越しのための運搬  ・雨漏りのする家屋のための土嚢づくり及びビニール  シート設置  ・大豆畑での農作業 | ・土砂だし  ・壁、床はぎ  ・厨房整理  ・家財道具搬出  ・仮置き場分別 | ・消防団詰所の片付け  ・閻魔堂の瓦おろし、  運搬  ・土嚢づくり  ・解体で出た木材の  運搬  ・被災家屋の瓦運搬 | ・被災した保育所の  遊具運搬、掃除等  ・仮設保育所の設備  整備  ・納骨堂の瓦おろし、運搬  ・ひまわり迷路作り  ・除草作業  ・仮設住宅のプランター追肥作業 |

●　2016年度の特徴的な事業②―Global Leadership Program（インドネシア）

2016年度には、インドネシア　ジャカルタとジョグジャカルタで2回ずつ、計4回のプログラムを、現地受入団体Alternative Projectと協働で開催し、延べ36名の学生が参加をした。2つのプログラムの共通した目的は、自分で考え行動する「主体性」、異なるバックグラウンドをもつ参加者と協働することによって得られる「多様性」、共同生活や一つのことを共に作り上げることによって鍛えられる「伝える英語」を学ぶこと。2週間のプログラム中の期間は、インドネシアで募集をしたインドネシア人メンバーを含めた全員で同じ場所に宿泊をし、共同生活を送りながら活動した。

ジャカルタでの活動は、インドネシアで活躍する社会起業家にインタビューをするプログラムを開催した。現在、インドネシアがかかえる多くの社会課題を改善するためにビジネスを興し、自分の国を良くしようと知能と情熱をもって取り組む社会起業家も増えている。そのような社会起業家に直接インタビューし、動画やプレゼンテーションを作成、プログラムの最後に社会企業家とその企業に興味をもつ学生に向けて発表した。

ジョグジャカルタでの活動は、市内の低所得者層エリアにある、近隣の小中学生が通う寺子屋でのワークショップを開催。寺子屋に通う子どもが自分の将来を考え、切り拓く力を刺激することを目的として、環境教育、モラル教育をテーマとし、ゲームなどを通じて、楽しみながら学ぶワークショップを、ゼロから作り上げた。

2週間、バックグラウンドが異なるメンバーとディスカッションをくりかえし、プログラムを作っていく中で、参加者からは、グループワークや、他の人と意見を交わすこと、自分の意見を発信することについて楽しいと感じ、自信がついた、という声があがった。異なる環境で、異なるバックグラウンドのメンバーとの協働が、大きなインパクトを与えるということが顕著にみられたプログラムとなった。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | **第1回** | **第2回** | **第3回** | **第4回** |
| **活動日程** | 8月4日（木）  ～18日（木） | 8月30日（火）  ～9月13日（火） | 2月5日（日）  ～19日（日） | 2月27日（月）  ～3月13日（月） |
| **活動場所** | ジャカルタ | ジョグジャカルタ | ジャカルタ | ジョグジャカルタ |
| **参加者数** | 8名 | 10名 | 8名 | 10名 |
| **男女比** | 4：4 | 2：8 | 3：5 | 2：8 |
| **参加**  **大学数** | 6校 | 7校 | 5校 | 10校 |

予 算 ：61,104,000円

実 績 ：62,807,048円

主だった支出：海外委託費、委託費（派遣に係る引率業務委託費）、旅費、バス諸費用

執行率 ：102.8％

**セミナー/シンポジウム事業**

●　事業概要

セミナー/シンポジウム事業では、災害ボランティアセミナー、ボランティアシンポジウム、PR力コンテスト「V-1」を開催し、プラチナ未来人財育成塾における大学生チューター支援を行った。

災害ボランティアセミナーは、災害時に学生がボランティアとして迅速に活動できるよう災害ボランティアの初歩を学ぶ内容となっている。

またボランティアシンポジウムでは、当センターと連携して事業を行なっている大学の学生の活動報告が主な内容となっている。他の取り組みを通して、自分の取り組みを見直す機会をつくることと、ボランティア活動をする学生たちのネットワークを構築することがこの事業の目的である。

PR力コンテスト「V-1」は、学生ボランティア団体を対象にした映像コンテストである。

プラチナ未来人財育成塾＠会津は、将来の社会を担う人材を育成する目的で、新生日本・再生故郷実行委員会、プラチナ構想ネットワークが主催。当センターでは、参加者である中学生をサポートするための大学生チューターの教育の支援を行った。

●　2016年度の事業

□災害ボランティアセミナー

1. 開催日時：2016年12月13日（火）　　二松学舎大学(東京都千代田区)にて

内　　容：平成28年熊本地震などを例に、災害現場で学生が果たす役割と効果を講義

講　　師：伊藤章氏（特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会 理事）

砂田和樹氏（同・学生代表、法政大学）

　 参 加 数：130名

1. 開催日時：2017年 1月13日（金）　　聖心女子大学(東京都渋谷区)にて

内　　容：東日本大震災の活動やこれからの災害への備え、災害ボランティアの心構えを講義

講　　師：伊藤章氏（特定非営利活動法人国際ボランティア学生協会 理事）

参 加 数：9名

□ボランティアシンポジウム

開催日時：2017年2月4日（土）、5日（日）

BumB東京スポーツ文化館(東京都江東区)にて

参 加 者：愛知淑徳大学、中央大学、福山市立大学の学生ら

内　　容：「プレゼン講座」「取材と報告づくり講座」による学びと、学生の活動発表

講　　師：横尾俊成氏（特定非営利活動法人グリーンバード代表）

森田泰進氏（読売新聞社）

参 加 数：32名

□第7回PR力コンテスト

開催日時：2016年12月4日（日）　「V-1」2016　 GAホール（東京都北区）にて

出場団体：9団体

内　　容：「リアルを撮れ！」を映像テーマに設定し、コンテストを実施。

審査委員： ＊委員長　鎌仲ひとみ氏（映像作家）

横尾俊成氏（特定非営利活動法人グリーンバード代表）

武井裕典氏（特定非営利活動法人Youth for 3.11代表）

　受賞団体：　グランプリ賞・会場賞　：　特定非営利活動法人グッド

　審査員賞：　DOORS-日越交流プロジェクト-

※映像制作セミナー：8月6日（土）、10月1日（土）、11月5日（土）　　　　　　　　　日本財団第二ビル6階にて3回開催

審査委員鎌仲氏が画像構成・編集などを実践講義。

□プラチナ未来人財育成塾＠会津

開催日時：7月31日(日)～8月6日(土)　　千葉県柏市、福島県会津若松市にて

参 加 者：93名の中学生

大学生チューター：21名

内　　容：日本・世界で活躍する著名人の講演やグループワークを通じた「未来のリーダー」育成プログラムにおいて、チューターは中学生のサポートを実施。千葉県柏市の柏の葉からスタートし、スマートシティ見学や各界で活躍する講師からの講義やワークを実施。3日目からは福島県会津若松市へバスで移動し、講義・ワークのみならず地域の伝統・特性を活かした活動として、ろうそく絵付と鶴ヶ城での点灯や日新館見学などを行った。

※事前研修：大学生チューターの教育支援として2回実施

2016年6月18日（土）　柏の葉カンファレンスセンター

2016年7月2（土）～3日（日）　会津若松市内

予算：29,491,000円

実績：10,363,671円

主だった支出：旅費(参加学生移動のため)

執行率：35.1％

理由：チラシ・パンフレットなどの制作費、会場の賃借料などが予定より抑えられたため。

**インターン事業**

●　事業概要

当センターでは、学生目線から学生ボランティアの支援を行うため、学生インターンが主体となり、様々な事業を実施している。毎年、首都圏の大学から、約10名の学生インターンを募集し、4月から翌年3月までの一年間、当センターで活動をする。

学生インターンは、PR力コンテスト 「V-1」の企画・運営やその他自主イベントの企画・運営、当センターが実施するイベント等の補佐を行う。

●　2016年度の特徴的な事業―「ボランティアののぞき穴～気軽に始める短期ボランティア～」

「もっと学生にボランティアの良さを知ってほしい」という想いを基に、学生の“はじめの一歩”を後押しできるイベントとして、様々な分野の団体の活動内容や短期ボランティアの紹介が一度に聞けるイベントを企画し、2017年3月20日（日）、御茶ノ水ソﾗシティカンファレンスセンターにて開催した。

イベントでは、国際・環境・医療・福祉・子どもなど分野の異なる9団体が参加し、ブースでそれぞれの活動目的や内容、気軽に参加できる短期ボランティアの紹介を行ってもらった。少人数で話を聞けることから、具体的かつ細かい質問などもしやすく、ボランティアに対する不安を解消し、具体的なアクション（ボランティア活動への参加）につなげたいとアンケートで応えてくれる参加者が多かった。

また、同世代の実体験を聞いてよりボランティアへのイメージや参加意欲を湧かせてもらうために、様々なボランティア活動に携わっている学生に実体験を話してもらうトークセッションも行った。真剣な眼差しで話を聞く人や、熱心にメモをとる人、終了後に登壇した学生に質問や相談をする人の姿が見られ、同世代の言葉が持つ効果の大きさを実感した。

　インターン達も会場では積極的に参加者へ声掛けをし、悩んでいる人の相談に乗ったりブースへ案内したりする姿が見られ、一人でも多くの参加者に実りを持って帰ってもらおうという想いの強さを伺うことができた。

＜イベント出展団体（当日のブース番号順）＞

・特定非営利活動法人キッズドア

・独立行政法人　国立青少年教育振興機構

・特定非営利活動法人Youth for 3.11

・特定非営利活動法人グッド

・特定非営利活動法人ジャパンハート

・特定非営利活動法人放課後NPOアフタースクール

・特定非営利活動法人ぱれっと

・特定非営利活動法人 NICE（日本国際ワークキャンプセンター）

・認定特定非営利活動法人JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）

予 算：5,019,000円

実 績：1,008,511円

主だった支出：旅費（合宿や災害被災地への出張のため）

執行率：20.1％

理由：Gakuvo東北の学生メンバーが解体し、連携がなくなったことで旅費が大幅に抑えられたため。

EMACの保管料をインターン事業ではなく情報発信事業から拠出することに変更になったため。

**教育活動支援**

* 事業概要

　当センターが推進する学生ボランティア活動は、学生や高等教育機関にとって、社会貢献

に寄与するという意味合いとともに、学生の成長や教育効果上の意義という二つの側面をもっている。その双方が重要であることはもちろんだが、本事業ではおもに後者にスポットをあてたプログラムを実施した。

* 2016年度の事業

2016年度は、白百合女子大学、聖心女子大学と事業を展開した。宮城県亘理町、岩手県陸前高田市をフィールドとし、亘理町に関しては白百合女子大学、聖心女子大学双方の学生を対象とし、陸前高田市は聖心女子大学の学生のみで行った。

亘理町では学生企画のワークショップを開催。香り袋、うちわ、ピンクッションといった手芸・工作を行いながら地域の方との交流を行った。

また陸前高田市では、毎年8月7日に行われるうごく七夕祭りのお手伝いのボランティアプログラムも実施した。10月に聖心女子大学で開催された学園祭には、うごく七夕まつりのお手伝いで携わっている川原祭組を招き、お囃子披露も実施し現地とのつながりをより強めると共に、学内や一般の方にも活動を知ってもらえる機会となった。

予　算：5,174,000円

実　績：1,594,348円

主だった支出：バス諸費用

執行率：30.8％

理由　：実施を想定していたプログラムが中止になったため。

予定していたプログラムが講座プログラムからの支出に変更となったため。

**情報発信**

ボランティアに興味・関心を寄せる学生たちがホームページに訪れやすいよう、学生の利用頻度が高いスマートフォンでも閲覧しやすいホームページの開発に力を入れた。

　前述した熊本地震ボランティア派遣を受けて、緊急性の高い災害ボランティア活動については、通常とは異なるカテゴリーを設置し、学生たちがすぐに情報を得られる仕組みを開発した。

　また「学生が毎日でもサイトを訪れるような仕組み」としてキャラクターがボランティアの豆知識を教えてくれる仕掛けの基盤作りを実施し、2017年度から本格的に運用を行っていく。

当センターの全体像が一目でわかるような説明資料として、報告冊子を作成し、全国の大学を中心に発送し、広報宣伝につとめた。

学生をターゲットとして情報発信と、大学教職員をターゲットとした情報発信のツールが異なることから、双方に対応できる情報発信を引き続き行っていく。

予 算：13,984,000円

実 績：7,510,364円

主だった支出：委託費（ウェブサイト更新に伴う業務委託費）

執行率：53.7％

理由　：ホームページに関する大きな変更や新構築が少なく、委託費が抑えられたため。

報告書作成においてはコストパフォーマンスのよい業者の選定につとめたため。

参考）

**学生委員会**

学生ボランティア支援に際し、不可欠なのは学生自身の視点である。その視点から学生ボランティアのニーズを吸い上げる目的で、第二期学生委員会を発足。大学ボランティアセンタースタッフ、留学生、当センターの事業参加者など多彩な顔ぶれで活発な意見交換がなされた。

今年度は団体に所属していたり、運営側を担っている委員が多かったため「ボランティアがより多くの学生に受け入れられる、広まるためには」というテーマについての議論を重点的に行った。また、ボランティアセンター学生スタッフを務める委員の大学（新潟県）で委員会を実施し、オブザーバーとして上記大学の学生スタッフにも委員会に参加してもらい、より充実した議論を交わすことができた。

首都圏だけでなく、各地域の気質やニーズを吸い上げ、より多くの学生のボランティア活動を支えられるよう、引き続き多種多様な委員たちの力を借り、今後の当センターの活動に取り入れていきたい。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 |
| 開催日程 | 9月19日（祝） | 11月13日（日） | 2月14日（火） | 3月22日（水） |
| 開催場所 | 当センター | 当センター | 新潟青陵大学 | 当センター |
| 主な議題 | ・委員の活動  経歴について  ・学生ボラン  ティアに係る広報について | ・学生たちが持つ「ボランティア」イメージについて  ・学生ボラン  ティア派遣チーム「ながぐつ」プロジェクトの広報について | ・ボランティア参加を促す広報戦略について  ・新潟青陵大学ボランティアセンターについて | ・全4回の振り返り  ・次年度への引継ぎについて |